



アフリカの COVID-19 対策・支援

先日実施した会員アンケートで、今後アフリカでの感染拡大を懸念する声や、国際機関の支援について関心を持つ方が多かったので、今回の会報で取り上げました。(事務局)

インタビュー

エチオピア・人道支援分野の COVID-19 対応

エチオピア UNICEF
WASH コーディネータ
高橋逸郎さん



Q: 普段の業務内容は？

エチオピアでの緊急人道支援活動における水衛生クラスターのコーディネータとして活動しています。エチオピアの人道支援の主な対象は、民族紛争、干ばつ、洪水などにより被災した170万人の国内避難民やコレラが発生した地域、そのほか人命に関わる支援対象としています。人道支援の活動分野は幅広く、水衛生以外にも、被災者の保護、食料や住居の支援などがあり、全体を統括する UNOCHA*の下で関連する国連機関が連携して支援しています(クラスターアプローチ)。私は水衛生クラスターのコーディネータなので、水衛生クラスターの戦略立案、ガイドラインの策定、ニーズ調査結果に基づくギャップアナリシスやアドボカシーの他、NGO や国際機関が現場で実施する人道支援の調整とそれら支援組織の支援計画を取りまとめプールファンドから資金を拠出し事業を監理するなどの業務をしています。具体的には、国内避難民は安全な飲み水も衛生施設もない環境に数百人から数千人で生活しているため、安全な水の提供やトイレの設置、衛

45号 目次

- ・アフリカの COVID-19 対策・支援
 - UNICEF のエチオピア人道支援.....1
 - (Facebook はじめます！.....2)
 - 日本ハビタット協会のケニア支援.....3
- ・COVID-19 で家族が離れ離れに4
- ・私の日本の生活と COVID-19 の影響..... 5
- ・神奈川県海外技術研修の経験.....6

生啓発活動などのプロジェクトが実施されています。

Q: エチオピアでのコロナ感染症の状況は？

5月下旬までは海外渡航歴のある人が主な陽性者であったため緩やかなロックダウンで感染者数を抑え込んでいましたが、6月に入り市中感染が拡大し1日100人~200人程度(多いときは400人)の感染確認が報告されています。空路・陸路ともに海外からの渡航者・帰国者は政府指定の隔離施設にて原則2週間の隔離生活が義務付けられています。外国人以外にもサウジアラビア、レバノン、クウェート、UAE などの中東諸国から帰国する出稼ぎ労働者のほか、ソマリア、ジブチ、スーダン、ケニアなどの近隣国から陸路で入国する人も多いです。隔離施設においても、マスクなど感染予防具や消毒液などが不足している上、十分な衛生環境が整っていないのが現状です。

政府の対応として、4月上旬に非常事態宣言を行い、州間の移動制限や5人以上の集会禁止、学校閉鎖などの措置が出されました。業務環境としては、官公庁を含むオフィスの職場はテレワークが導入されており、私もテレワーク中心で業務をしています。一緒にエチオピアで生活していた家族は、3月中旬に学校が閉鎖となった際に日本に帰国しましたが、私は現在もアディスアベバに滞在しています。

Q: UNICEF の COVID-19 対応ではどんな活動を？

COVID-19 パンデミック以降、業務の中心は COVID-19 対策に移りました。WHO などの国際機関や、他のドナーとも協調して、感染予防とリスク管理の

ための活動を行っています。テレビやラジオでの手洗いや社会的距離を励行するための広報・啓蒙活動を実施していますし、並行して住民が手洗いや消毒を行えるような資材・設備の整備も支援しています。手洗いや消毒の重要性を訴えても、手洗いのための水やせっけんが不足している状況なので、水道の未整備地区に給水トラックで給水する、石鹼や消毒液を配布する、また 3L のタンクに蛇口がついた手洗い用タンクも配布したりしています。



手洗いに使用されている蛇口付きの水タンク
(写真: ethiopia-insight.com)

Q: 国際機関に従事されて、感じたことは？

大きく 2 つあります。1 つ目として、国連機関はあるべき理念を掲げて仕事をしているので、その理念を実際に実行するという姿勢が徹底していると感じること。特に、日本の組織ではジェンダーや権利、差別やハラスメント

に対する意識が低いと感じていましたが、国連では全職員にオンライン研修なども実施しています。ハラスメントが発覚してポストオフという話も聞きました。組織の Reputation Risk の観点からも徹底していると感じます。日本の開発関係者も、この点の意識を高く持つべきだと感じます。

もう 1 点は、各職員の業務内容と権限が明確で、正規・非正規などの区別に関係なく、専門性が尊重されるという点です。組織内の上下関係に関係なく、専門性の見地から率直に発言できる文化です。やりがいがあり、自分の意見を磨ける職場と言えますし、一方で常に研鑽が必要とも思います。(了)

【高橋さんの略歴】 2018 年 6 月より現職。妻子と共にアエチオピア駐在 6 年目。インドとイギリスの大学院にて修士課程修了。NGO 駐在員、草の根委嘱員としてインド駐在。ジュニア専門員、専門・特別嘱託などで JICA 本部、JICA 長期専門家としてザンビア、企画調査員としてエチオピア、ヨルダンにて勤務。開発課題・社会課題の解決に携わる人や組織のための音声プラットフォームとしてポッドキャスト Fairly.fm を主宰。

(インタビュー: 事務局 倉内)



*UNOCHA: United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs: 国連人道問題調整事務所

Facebook 始めます！！

国内外の全メンバーが、相互に自由にやり取りできるように、Facebook のグループ機能を活用して、コミュニティを立ち上げることにしました。開設したのは、2 つの機能です。

1) Facebook の WaQuAC-NET 公開ページ

<https://www.facebook.com/Waquac-net-Water-Quality-Asian-Cooperation-Network-109305527479226>

2) ワクワク会員限定のチャット

WaQuAC-NET の会員相互の議論及び情報共有の場として、以下の内容を扱います。

・WaQuAC-NET が情報提供する内容の共有

・メンバー同士による水道・水質に係る問題点、疑問点の議論

・メンバー同士による情報交換

2)への参加は事務局からの招待制ですので、まだ登録いただいてない方は、事務局にご連絡ください。



日本ハビタット協会
ケニア・スマイルトイレプロジェクト

篠原大作



篠原さん

WaQuAC-Net のみなさま、新型コロナウイルス感染症が多方面に影響を及ぼし、みなさまが進められている事業にも影響が出ていることと思いますが、お変わりございませんでしょうか。

私が所属しております認定 NPO 法人日本ハビタット協会は、ケニアにおいて衛生環境改善事業「スマイルトイレプロジェクト」を実施しております。清潔なトイレは、貧困の削減、人々の健康、教育機会の提供、ジェンダー平等につながる「まちづくりの特効薬」であるとの考えから、ケニア西部のホームベイ県カボンド地区において、トイレ建設を進めています。トイレを普及させることで、野外排泄に起因する川や池の水汚染を防ぐことにもつながります。



写真1. 野外排泄による水汚染



写真2. 住民自信が建設するトイレ

このプロジェクトでは、住民自身が自分の家にトイレを建設しています。住民主体のまちづくりは日本ハビタット協会が目指すまちづくりです。そのため、住民の衛生意識変革を促すワークショップの開催や適切なトイレと手洗い場の建設技術指導を行っています。またトイレ建設費は住民が負担するため、貧困家庭を対象に所得向上のための農業技術指導も行っています。



写真3. 専門家による農業指導

さらに、マイクロファイナンス手法も取り入れ、住民の負担が

あまり大きくなるようにしていくことで、着実にトイレ建設が進みます。

2019 年度は、10 村 1,331 世帯を対象に行いましたが、トイレの普及率は、事業開始前には、全 697 世帯で約 60%ほどでしたが、約 339 世帯でトイレが建設された結果、2020 年 2 月時点では、79%に達し、2020 年 8 月までには全世帯にトイレが普及すると期待されます。また、建設するトイレには、日本の Lixil が開発したプラスチック製の便器 (SATO Pan) の導入を推奨していますが、この便器は、1ℓ 以下の水で流せるよう改良が加えられており、水や下水設備がない貧困地域では大変有効です。

新型コロナウイルス感染が世界規模で拡大している中、医療システムが脆弱なケニアにおいては、大きな脅威となっています。感染を予防し人々の命を守るため、清潔なトイレと手洗い場の設置が強く求められています。ホームベイ県保健省から要請を受け、対象地域をさらに拡大し、トイレ建設と石鹸付きの手洗い場の設置を進めています。



写真4. Global+Hand+Washing+Day での啓発活動

現地協力団体の職員をはじめ、保健省職員、各村の衛生ボランティアにはマスクを配布し、ソーシャルディスタンス確保などの感染予防も講じています。衛生環境を改善することで、感染症のリスクを減らし、ケニアの人々の命と暮らしを守っていきます。(了)



写真5. 保健省と協力して新型コロナウイルス感染予防

COVID-19 で家族が離れ離れに
(カンボジア王国・廣渡家の場合)

北九州市上下水道局
廣渡 博

2018 年 6 月末、カンボジア国水道事業人材育成プロジェクト・フェーズ3が完了し、意気揚々と一家 5 人で日本に帰国した。長男と長女はこの時 14 歳と 16 歳。今後の進路を二人とよく話すと、



廣渡さん

英語の環境下で学びたいと熱望していたので、彼らをカンボジアのインターナショナルスクールに戻すことに決めた。家族が離れ離れになることに一抹の不安を覚えながらも、妻と子供たちは 2018 年 8 月にカンボジアへと戻った。私は、北九州市上下水道局海外事業課において、カンボジア上水担当となり、カンボジアと日本を往来する生活が始まったことで、家族とは会うことができていたし、2019 年の夏には再び家族を日本に一時帰国させるなど、家族との繋がりはいつも通りであった。2019 年 7 月末、家族 4 人は再びカンボジアの地へと戻ったが、2019 年 9 月初旬、妻から第 4 子の懐妊を告げられた。今後の生活など一抹の不安もあったが、それよりも喜びのほうがとてつもなく大きく、「より一層精進しなければ」と決意を新たにした。

そのあとは、シムリアップ上水道拡張計画における施工監理、11 月に実施した工業科学技術革新省(旧工業手工芸省)大臣及び高官の日本への招聘、2020 年 1 月に実施した日本カンボジア上下水道セミナーなど、日本とカンボジアの往来もそうであるが、シムリアップとプノンペンの移動もかなり多く、私生活と業務が非常に楽しく、まさに充実した日々を送った。

2019 年 12 月中旬から 2020 年 1 月中旬まで、疲れがたまったのか少し無理をしてしまい戦列を少し離れ、その後はしっかりと復帰したのだが、今度は COVID-19 の暗闇が静かに世界を覆い始めることとなった。我々上下水道局の基準では、外務省危険情報(このときまだ感染危険情報ではない)がレベル 2 以上となれば、

職員の派遣は取りやめ、緊急帰国させる方針であったが、2020 年 3 月初旬の段階ではレベル 1 であり、4 月 5 日からの業務渡航を計画していた。他方、私生活では、妻の出産が 4 月 1 日の予定で、渡航の際には立ち会えると安易に考えていた。事実、3 月初旬に勤続 20 年の有休を活用してカンボジアに帰り、家族と過ごしたのだ。そしてこの時、学校が遠隔授業に切り替わる等情報を得て、長男、長女を早速日本に一時帰国させた。

だが、3 月 25 日、外務省から全世界に危険情報レベル 2 が発信されることとなり、4 月に予定していた業務渡航が不可能となった。妻の 4 月の出産まではぎりぎり間に合うか、一緒に日本に行けるのかなど、これから家族がどうなるか分からない五里霧中のなか、3 月 27 日にカンボジア王国保健省から、入国に際し「72 時間以内の無り患証明」や「50,000USD の医療保証書」を提出するなどの通達が出され、合わせてアライバルビザの発給が中止された。残された家族が日本に一時帰国するには、出産を終えた妻が幼い二人の子供を連れて旅する必要があり負担が大きい。我々家族は、ついに日本とカンボジアの往来に大きな支障が生じたことで離れ離れになってしまった。



写真: 廣渡一家

幸い現在は、いろいろな通信手段があり、相手の顔を見ながら連絡が取れる社会となったことで、スカイプ等がなかったころに比べれば家族間のストレスは少しだけ軽減され、真に離れ離れになることはないだろう。だが、私の家族にとって生活費や会えないストレスなど負担は大きく、大きな問題である。

カンボジア王国の COVID-19 患者数は 128 人(2020 年 6 月 15 日時点)。疫病が社会経済に大き

な影響を与える中、4 月 4 日、娘が無事に産まれた。桜が咲き乱れる時期であり、さくらと命名した。COVID-19 後は New Normal をキーワードとした生活様式に移行すると言われていたが、いずれそれが日常になっていく。水道普及による公衆衛生の向上は、疫病対策に確実に有効である。新しく生まれた娘の日常が良い方向に向くことを願い、公衆衛生向上のため国際貢献していこうと決意を新たにした。(了)

私の日本の生活と COVID-19 の影響

PPWSA (カンボジア)
Mr. Chenda Pharith

COVID-19 は昨年末に世界に出現しました。最初の流行は中国の武漢で始まり急速に地球全体に広がり、日本でも同様に感染が広がりました。それは深刻で 3~4 月に感染者はピークに達しました。



パリンチさん

日本政府は全都道府県に緊急事態宣言を出し、宣言中は日本国民に外出を控える事や勤務時間の短縮、在宅勤務、オンライン授業、店など事業の休業を要請しました。これに対応して、日本政府、安倍首相は国の GDP の 40% に相当する約 200 兆円の資金を経済回復政策として、個人や中小企業の救済措置等に投入することを決めました。

私は昨年 9 月日本政府の奨学金を得て、カンボジアから来日し、東洋大学の修士課程に在籍しています。(会報 43 号参照)

この困難な時期の私の日本での生活について述べたいと思います。私だけでなく新型コロナウイルスの感染が起きているすべての国の人々は毎日の生活に大きな影響を受けています。ほとんどの人々が家にいるという状況ですが、それは退屈でストレスの多い生活です。私の経験では、3 日に 1 度食料や日用品を買うために外に出ます。最も重要なことは誰がウイルス保持者か分からないので感染を防ぐためにマスクを付け続けること

です。私は感染者が多い千葉県に住んでいるのでマスク着用はさらに重要です。私は最高レベルで注意をする必要があるのです。

大学生活に目を向けると、COVID-19 の厳しい状況の間、大学はオンライン授業を決めました。そのため、私は実際のクラス授業とは全く異なるオンラインで勉強しなければなりません。時々インターネットの容量が足りない事や接続の問題で中断します。正直に言うと、エーリングは適切だとは思えないし、心地よく感じません。

家にいなければならないので、海外にいる家族に会いたくなります。それで私はほとんど毎日寝る前に家族とテレビ電話で話をします。日本の時間はカンボジアより 2 時間早いので、彼らにとっては利用しやすいのです。

幸いなことにカンボジアの感染者数は 122 名、死亡者は 0 名です(2020 年 6 月 5 日現在)。それでも私は家族に注意して生活するように勧めています。

最後に重要なこととして、治療のためにワクチンが開発され世界からコロナウイルスがなくなり、再び COVID-19 の大流行が起こらない事を私は願っています。

また、私はワクワクネットの事務局と全ての会員の皆様に敬意を表すとともにこの世界的な大流行のなかで安全に過ごされることを願っています。



写真: 家でカンボジア料理を作る

神奈川県海外技術研修の経験

MWA(タイ)
Ms. Weesuda Chaloeythit

皆さん、私の名前は“ビー”(ニックネーム)と言います。タイ首都圏水道公社(MWA)の水質管理の仕事をしています。



ビーさん

私は 2019 年度の神奈川県海外技術研修生のための奨学金を得て 6 カ月間の研修プログラムを受講しました。この長い研修は私にとって最初の日本訪問でしたのでとてもワクワクしました。

研修プログラム

最初の 1 カ月半は青年海外協力協会(JOCA)から派遣された先生に日本語を学びました。



写真1. 日本語研修

その後、関東学院大学の鎌田素之博士のもとで長期にわたり環境分野の技術研修を受けました。鎌田研究室では主に FT-IR (フーリエ変換赤外分光光度計)でマイクロプラスチック分析の実習を行いました。

横浜市水道局の西谷浄水場、神奈川県広域水道企業団では水質管理について学びました。東京都水道局の朝霞浄水場では高度処理施設を、横浜市水道局の川井浄水場では頑丈で耐薬品性のあるセラ



写真2. 横浜市水道局水質検査室

ミック膜による水処理施設を視察しました。この技術は MWA には無いので非常に興味深かったです。私はまた相模湖に水源調査に行きました。

メタウォーターではジャーテストの実習を行いその結果を報告しました。

日本水道協会(JWWA)の研究発表会や水環境学会(JSWE)のマイクロプラスチックに関する研究会にも参加しました。

日本では夏に水道水の匂いがするという苦情が来るが、匂いの原因は藻類などが産生するジオスミンや 2-メチルイソボルネオール(2-MIB)で粉末活性炭によって除去できると学びました。

技術研修の最後に私は管内清掃工法の一つであるアクアピッグ工法を栃木県の中里建設で見学しました。その工程は最初に柔らかいボールを管内に入れて圧力をかけて流し沈殿物や汚れをふき取ります。大変面白い工法で MWA は活用すべきだと思いました。



写真3. 神奈川県広域水道企業団の皆さんと

研修期間を通して私は土日・休日に様々な催しに参加しました。日本の歴史的な神社やお寺を見るために京都や鎌倉を訪れ、江ノ島や川崎、大船にも旅行しました。地元の人達との文化交流で日本料理講習や折り紙講習会に参加し、歓迎会や送別会も催してくれました。

日本の子供達とのスポーツデイや障害者の人達とのパラスポーツ(ボッチャ、ローリングバレー)を楽しみました。



写真4. 仲間と京都研修旅行

また神奈川県を紹介するビデオ作製にも関わりました。私個人の自由時間には東京や千葉、横浜の観光スポットを訪れました。

感想

水質管理や水質分析などの技術的な側面とは別に、滞在期間が長かったので、日本の文化に適応する方法も学びました。特に交通手段では、タイでは移動は自分で車を運転していましたが、日本では電車に乗らなければならず、時間に間に合うように自分自身を管理する必要がありました。日本人は時間を守ることを重視していると感じました。

最後に、私が住んでいたドミトリーには海外から来ている人が多く住んでいたため、たくさんの外国の友人ができました。

謝辞

関東学院大学の鎌田先生始め、神奈川県、横浜市水道局、神奈川県広域水道企業団、メタウォーター、JOCA、JICA、JECK、WaQuAC-Net の皆様には 6 か月間大変お世話になりありがとうございました。また、この研修に応募する絶好の機会を与えてくれた MWA の上司、シヴィライさんとチャウイパンさんに感謝します。

私は日本で出会った皆様を思い出し、今後も連絡を取りたいと思っています。そして日本に必ず戻ってきます。



写真5. 神奈川県庁での修了式

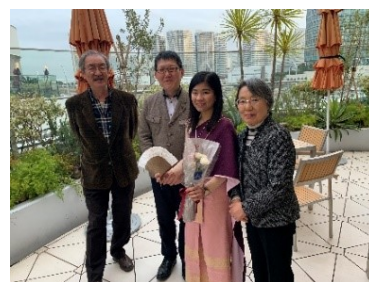


写真6. WaQuAC-Net の送別会

* 神奈川県庁での研修修了式と研修生の発表会、及び WaQuAC-Net の送別会は 2020 年 3 月 9 日、新型コロナウイルス流行の影響で規模を縮小して実施されました。ビーさんはタイに帰国後家族と離れて別の家で 2 週間の隔離生活を送りました。(事務局山本)

WaQuAC-NET 会報 第 45 号

発行：2020 年 6 月 30 日

WaQuAC-NET 事務局

連絡先：waquac_net@yahoo.co.jp (鎗内)

URL：<http://www.waquac.net>

今後の活動予定

6 月末 Facebook で情報共有開始

7 月 15 日 Newsletter vol. 45 発行